

田山花袋「一兵卒」

田山花袋（1872 - 1930）は自然主義文学の担い手として活躍した作家です。「蒲団」「田舎教師」などがその代表作です。ここで取り上げる小説「一兵卒」（1908年）は短編です。花袋は1904（明37）年、博文館の第二軍私設写真班として半年間日露戦争に従軍しました。そこでの見聞などをもとにして、この作品は書かれました。冒頭を見てください。

渠は歩き出した。

銃が重い、背囊が重い、脚が重い、アルミニウム製の金椀が腰の剣に当たってカタカタと鳴る。その音が興奮した神経を夥しく刺激するので、幾度かそれを直して見たが、どうしても鳴る、カタカタと鳴る。もう厭になってしまった。

病気は本当に治ったのではないから、呼吸が非常に切れる。全身には悪熱悪寒が絶えず往来する。頭脳が火のように熱して、顛顛が烈しい脈を打つ。何故、病院を出た？ 軍医が後が大切だと言ってあれほど留めたのに、何故病院を出た？ こう思ったが、渠はそれを悔いしなかった。

この小説は、脚気のために入院した一兵卒（注：一人の下級兵士）が、軍医の止めるのも聞かず、原隊に復帰しようとして、一人で荒野を歩き、やっとたどり着いた先で、脚気衝心（注：脚気に伴う急性の心臓障害）のために死ぬという筋です。

冒頭の「渠（注：「彼」に同じ。後には「彼」または「かれ」とも表記）は歩き出した。」と始まる文体には工夫があります。この冒頭は、「九月一日の遼陽攻撃は始まった。」という末尾の一行と呼応して、苦痛に堪えてさまよう一兵卒の哀れさを描き出し、また、声高ではなく戦争に対する批判もあらわしています。

● Lesson 1

以下は、苦しみながら歩き続ける「一兵卒」の脳裏に、故郷豊橋を発つ時の光景や幼い日の思い出が去来する場面です。文中の□の中に入る語句を考えて下さい。□に入る語句は、先の冒頭の引用内の語句と同じものを意識的に使っています。

ふと汽車——豊橋を発つて来た時の汽車が眼の前を通り過ぎ